

自家血液注射療法ニ就イテ

京都帝國大學醫學部外科教室(磯部教授)

講師 醫學士 松 本 彰

第一章 綜 說

血液ヲ治療劑トシテ用フルコトハ隨分昔カラ行ハレテキル事デ、今日盛ニ行ハレテキル輸血法ハソノ特異ナ發達ヲ示シタ一方面デアル。シカシ又、自他ノ血液ヲ單ニ注射スルトイフ方法モ盛ニ行ハレタモノデ、特ニ、十八世紀時代ニ獸醫ノ間ニソノ發達ヲ見セ、人間ノ治療ニモ應用セラレルヤウニナツタ。コレニ次イデ、自家血清注射療法ナルモノガ流行シ、Spielhoff, Reiser, Nourney, E. Müller, R. Müller 等ニヨリ高唱セラレタモノデアル。

茲ニ說クトコロノ自家血液注射療法ナルモノハ、夫レ以後ニ勃興シタモノデ、前記ノ注射療法ノ血液又ハ血清ガ少量デアッタニ反シ、比較的大量ノ患者自家ノ血液ヲ患者自身ニ注射スル方法デアル。シカシナガラ注射物、又ハ注射部位ニ多少ノ相違ガアツテ之レヲ各創始者ニ從ツテ分類スルト次ギノ三種ニナル。

(イ) Lävén 氏法。(一九一三年)

(ロ) Goljanitzki 氏法。(一九一四年)

(ハ) Vorschütz 氏法。(一九一四年)

私ハ先ヅコレヲ方法ノ適應症、術式、並ニ効果ヲ文献ニツキテ述ベテミヤウト思フ。

第I節 Lävén 氏法

一九一三年、Lävén 氏ガ初メテ上唇疔ノ新治療法トシテ切開ニ併用シタ。ソノ後二三回ニ亘リ、疔、癰ニ適用シテ甚ダ効果ガアルト述ベテキルモノデ、ソノ術式ハ、先ヅ肘靜脈ヨリ血液ヲ採リ、コレヲ直チニ疔ノ硬結部ノ周圍ヨリ少シク

離レタ健康部ノ皮下ニ注射スルノデアル。但シソノ際出來ルダケ深層カラ極メテ淺部ニ至ルマデ隙間ノナイヤウニ注射スルノデアル。Liwen 氏ハ初メハ切開シテカラコノ注射ヲシタガ、後ニナツテハ先ヅ注射シテカラ切開シタ。又大低全身麻酔ノ下ニ行ヒ、患部ガ廣クテ使用スベキ血量ノ大ナル時ニハ、肘靜脈ヲ手術的ニ出シテ採血シテキル。若シ第一回ノ注射及ビ切開ニヨリテモ猶周圍ニ擴ガル時ニハ、續イテ第二回第三回ノ手術ヲ行フノデアル。

Liwen 氏ガ經驗シタ例ニヨルト、腫脹或ハ炎症性硬結ハ大抵速カニ去ツテ、治癒シテキル。タトヘ切開ノ後ニ炎症性硬結ガ擴ガツテモ、血液注射部位ヲ越ヘテ外ヘ擴ガルコトナク、一、二日ノ後ニ體溫下降ト共ニ腫脹並ニ硬結ハ漸次退行スルノデアル。又注射セラレタ血液ハ二十四時間位ハ腫脹トシテ殘存スルモ、其後次第ニ消失スル。タゞ血量ガ非常ニ多カツタ時ニハ後ニ皮膚ニ色ガツクコトガアル。

然ラバカ、ル血液注射ノ有効作用ハ何デアラウカ。コレニ對シテ同氏ハ次ノ項目ヲ舉ゲテキル。

- (一)、機械的ニ組織ノ間隙ヲ閉塞シテ病芽ノ進行ヲ防グ。
- (二)、注射セラレタ場所デ血液ガ殺菌的ニ作用スル。
- (三)、蛋白體療法ノ際ニ於ケル蛋白體ノ作用ヲ全身的ニ及ボス。
- (四)、注射セラレタ血液ノ組成成分ガンノ場所デ破壊セラレ、附近ノ淋巴道並ニ淋巴腺ヲ充塞シテ、病毒ガコレヲ路ヲ介シテ擴ガラントスルコトヲ防グ。

又、同氏ハ常ニ顔面又ハ頭部ナドノ疔、癰等ニノミ適用シタ理由トシテ、コレヲノ場所デハ、皮下組織ガ薄クテ他ノ體部ノ如ク鬆粗デナイカラ、少量ノ血液デ充分ニソノ間隙ヲ充塞スルコトガ出來ルト言フコトヲ舉ゲテキル。

コノ Liwen 氏ノ方法ニ從ヒ、Linhart 氏ハ二例ノ上唇疔ヲ治癒セシメ、創始者同様ノ有効作用ヲ認メ、Hühner 氏ハ十例ノバルトリン氏腺炎ニ適用シテ、ソノ効果ヲ證シ、Tilman 氏ハ一例ノレントゲン潰瘍ニ適用シテ速カニ治癒セシメ得タコトヲ報告シテキル。

第二節 Goljanitzki 氏法

一九二四年ニ Goljanitzki 氏ガ感染創傷ノ完全ナル療法トシテ發表シタモノデ、感染創傷ノ周圍皮下並ニ肉芽内へ溶血現象ヲ起サセタ血液ノ溶液ヲ注射シテ、コレヲ治癒セシメヤウトスル方法デアル。

先ヅ、肘靜脈カラ血液ヲ採リ、コレヲ蒸溜水デ溶血セシメ、コノ血液溶液ニ適當ノ濃度ノ食鹽水ヲ加ヘテ等壓ニシ、コノ液ヲ創傷ノ周圍ノ組織内及ビ創底下ヘ注射スル。コノ注射ヲ日々繰返スノデアル。

同氏ニヨルト、コノ注射後二三時間デ創傷ノ周圍ニ適當ナ浮腫ト充血ガ起リ、凡ソ二十四時間存續スル。日々注射ヲ繰返シテユクト、十回乃至十二回ノ後ニハ、停滯性腫脹ト浮腫ガ出來、コレラガ創傷治癒ニ大イニ役立つノミナラズ、又血液ノ殺菌力モ増大スルトイフノデアル。

氏ノ治驗例ハ慢性骨髓炎三例、急性腱鞘炎三例、疔四例、腋窩膿瘍(切開併用)二例デ、骨髓炎ノ時ニハ腐骨ガ自然ニ排出セラレタト報告シテキル。

又氏ノ研究ニヨルト、コノ注射後ニハ血液像ニ變化ガオコル。乃チ赤血球ノ數並ビニ色素量ガ増シ、又淋巴球モ増加スト。氏ハコレヲ以テ創傷治癒ヲ促進セシメル一ツノ現象デアルト云ツテキル。シカシ之レニハ反對説ガアルノデ、Wolisch 氏モ、コレラノ現象ハ感染創傷自然治癒ノ傾向ヲ示スモノデハナクシテ異種蛋白ヲ非經口的ニ與ヘタ際ニオコルモノト同一デアアル、即チコノ注射療法ハ單ニ一種ノ刺激ニナルダケデ特殊ノモノデハナイト云ツテキル。

文献ヲ見テモコノ注射法ハ其後行ハレテハキナイヤウデアアル。

第三節 Vorschütz 氏法

一九二三年ニ、Joh. Vorschütz 氏及 Tenckhoff 氏ハ種々ノ自家血液注射療法ヲ發表シタ。コレニ二種類アル。

(一)、肘靜脈ヨリ採ツタ血液ヲ直チニ上腿ノ筋肉内ヘ注射スル方法。

(二)、肘靜脈ヨリ採ツタ血液ノ纖維素ヲ脫出セシメ、ソノ脫纖維素血液ヲ靜脈内ニ注射スル方法。但シコノ方法ハス

デニ一九二二年ニ、*Pyethon* 氏ガ刺戟療法トシテ發表シテキル。

第一回ノ氏ノ報告ハ主トシテ手術後肺炎ノ治驗デアルガ、一九二四年第二回ノ報告ニ於テハ、手術後肺炎以外ニ癰、疔、横痃、敗血症、發熱ヲ伴フ流産、創傷感染、外傷性及淋毒性關節炎、神經痛、濕疹、下腿潰瘍、急性痲疾、骨盤内結締織炎、膀胱炎、淋巴管炎、骨髓炎等ノ治驗例ヲ舉ゲテキル。

筋肉内注射法ハ簡單デアツテ、先ヅ肘靜脈カラ二〇—四〇蚝ノ血液ヲ採リ、コレヲソノマ、上腿ノ筋肉内ヘ注射スルノデアル。成ルベク發病後早期ニ注射スル方ガヨロシイ。大抵第一回ノ注射デ下熱シ、炎症竈モ漸次ヨクナルノデアルガ、然ラザル時ニハ日々繰返シテ行ツタ方ガヨロシイ。

脱纖維素血液ヲ靜脈内ニ注射スル方法ハ、先ヅ肘靜脈カラ二〇蚝位ノ血液ヲ採リ、豫メ消毒準備シテアル硝子球入りノエルレンマイエル氏「コルベン」ニコレヲ入レ、強ク攪拌シテ纖維素ヲ脱出セシメル。次ギニソノ脱纖維素血液ノ二蚝ヲ靜脈内ヘ注射スル。翌日或ハ二三日目ニハ先ヅ肘靜脈カラ矢張り二〇蚝位ノ血液ヲ採リ、コレヲ前回ノ如ク處理スル間ニ、前回ニ殘ツタ、即チ古キ脱纖維素血液ヲ全部靜脈内ヘ注射シ、次ニ其日ニ處理シタ脱纖維素血液ノ三蚝ヲ靜脈内ヘ注射シ、殘リヲ保存シテ置ク。カヤウニシテ、毎回注射スル新脱纖維素血液ノ量ヲ高メテ行キ、コレガ十或ハ十二蚝ニ達スルマデニハ大低ノ炎症性疾患ハ治癒スルトイフ。コノ際ニモ注射ハ發病後早期ニ始メルガヨロシイ。シカシコノ靜脈内注射法ハ、時ニ「シヨック」ニ似タ症狀ヲ惹キ起スコトガアルカラ注意セネバナラス。

Vorschütz 氏ノ説クトコロニ從フト、前述シタ疾病ニ罹ツテキル患者ノ血液ニハ、ソノ病芽モキルシ、毒素モアルシ、又ソレニ對スル抗體モアル。從ツテコレヲ注射スルコトハ、種々ノ血清、又ハ「ワクチン」等ヲ注射スルノト同様、自働並ニ他働免疫ヲナスコトニナル。尙其ノ上ニ、血液内ニハ、類脂體、鹽類、蛋白分解產物、種々ノ血球、血小板等ヲ含ム故ニ、非特異性ノ作用ヲ營ムコトモ出來ルトイフ。

次ギニ、注射スル時期ニツイテハ、出來ルダケ早ク行フガヨイト力説シテキルガ、ソノ理由ハ、次ノ様ナ次第デアル。

Rupel 氏ノ研究ニヨルト、種々ノ炎症性疾患ノアル際ニハ、血液中ノ「アルブミン」ガ「プソイドグロブリン」ニナリ、更ニ、「オイグロブリン」ニ變化シテ行ク。殊ニソノ早イ時期ニ於テハ、「プソイドグロブリン」ノ%ガ高イトイフ。ソシテコレヲ三ツノ蛋白質ノ中、「アルブミン」ハ抗毒性、殺菌性ヲ有ツテキナイガ、「プソイドグロブリン」ハ抗毒性ニ富ミ、「オイグロブリン」ハ凝集性、補體結合性ニ富ミ、抗元ヲ結合スル力ガアルトイフ。ソコデ、早イ時期ニ注射スルトイフコトハ、抗體ヲ注射スルトイフコトニナリ、從ツテ他働免疫ヲナスコト、ナリ、遲イ時期ニハ「オイグロブリン」ガ「プソイドグロブリン」ニ代ル故ニ抗元ヲ注射スルコトニナリ、從テ自働免疫ヲナスコト、ナル。

斯様ニ特異性並ニ非特異性ノ効果ヲ舉ゲテ、ソノ理論ヲ述ベテキルガ、又實際ニ於テ血液注射ヲ行フト、血液中ノ「グロブリン」ノ%ガ非常ニ高クナルコトヲ實驗シテ、カ、ル注射ハ疾患ノ自然治癒ヲ助長セシメルモノダトモ云ツテキル。又非特異性ノ効力ハ、Weichardt 氏ノ原形質刺戟療法、Bechtold 氏ノ膠樣體療法、Schittenhelm, Seiffert 其他諸氏ノ蛋白質療法、Bier, Boltz, Gahle 諸氏ノ刺戟療法等ト軌ヲ同ジウスルモノデアル。

Vorschütz 氏ノコノ發表ニ次ギ、Graef 氏ハ一九二五年、術後肺炎、氣管支炎ノ治驗例ヲ報告シ、氏ノ說ニ賛成シテキル。一九二六年ニ König 氏ハ手術後ノ肺合併症ニ「エーテル」注射並ニコノ自家血液注射ヲ施シ、四十三例ノ治驗ヲ報告シテキルガ、ソノ効力ハ創始者ノ云フヤウナ假說ニ一致スルモノデハナクシテ、採血スルコト其自身ガ瀉血ノ意味デ有効ナノダト說イテキル。シカシ又、同年 Schlaack 氏ハ同様ニ術後ノ肺合併症ニ筋肉内注射法ヲ適用シ、ソノ効果ヲ認メ、Vorschütz 氏ニ左袒シテキル。

第二章 余ノ經驗シタ臨床例

最近二三年ニワタリ、私ハ上述ノ種々ノ自家血液注射療法ヲ追試スル機會ニ接シタノデ、茲ニソノ病史ノ概略ヲ掲ゲ、ソノ結果カラ少シクコノ療法ヲ批判シテ見タイト思フ。

第一節 Löwen 氏法ヲ施シタ例

創始者ノ行ツタヤウニ癰、疔ノ患者ニノミコレヲ適用シテミタ。シカシ、私ハ切開術ヲ同時ニ行ツタコトハナイ。又全身麻酔モ施シタコトガナイ。

先ヅ、肘關節部並ニ患部ノ周圍、即チ注射部位トヲ法ノ如ク叮嚀ニ消毒シ、術者ハ手及ビ前膊ヲ完全ニ消毒スル。注射器及ビ注射針ハ普通用ヒラレテキルモノデヨイガ、太イ針ヲ用ヒタ方ガ便利デアル。又手術者ハ二人居ル方ガ便利デアル。乃チ一人ハ肘靜脈ヨリ採血シ、ソノ血液ヲ充タシタ注射器ヲ他ノ一人ニ渡ス、コノ人ハ直チニコレヲ注射部位ニ注射スル。ソノ間ニ前者ハ靜脈ニ挿入シテアル針ニ新ラシキ注射器ヲ接ギ採血スレバヨロシイ。カクスレバ、相當ニ大量ヲ採血シ、同時ニ之レヲ注射シ得ル。血液ガ凝固スルヤウナコトハ大抵ノ場合起ラナイ。注射スル際ニ疼痛ヲ訴ヘルガ、針ヲ穿刺スル場所ニ「ネオカイン」液ヲ少量注射シテオケバ、皮下ニ血液ヲ浸潤セシメルタメノ疼痛ハ大抵ノ患者ニ耐ヘラレルモノデアル。

第一例。澤田某、三一歳、男、癰。

既往症。一週間前ニ、左肩胛部ニ小サナ膿痂疹様ノモノヲ生ジ、迅速ニ増大シ、疼痛ヲ感ズルヤウニナリ、皮膚發赤シ、二日前カラハ疼痛ノタメニ睡眠ガ妨ゲラレルヤウニナツタ。

入院時所見。榮養佳良ノ中等大ノ男。胸部腹部内臓ニ認ムベキ變化ハナイ。四肢ニモ異常ヲ認メナイ。背部ヲ見ルト、左肩胛部ニ縦一二種、横一五種位ノ腫脹ガアル。皮膚ハ發赤シ、中央部ハ暗赤色ニ變ジ、コノ部ニ點狀ニ膿様物質ガ見エル。觸診スルト局所體溫上昇ガ著シク、發赤部ニ相當スル硬結ガ觸レ、壓痛ガ明カニアル。波動ハ觸レナイ。體溫ハ三十八度九分、脈搏七十九ヲ算ス。尿中糖陰性。

手術。翌日自家血液ヲ硬結部ヨリ一糰位離レタ周圍ノ皮下ニ注射シタ。所要血量三〇ㄔ。注射時始メ疼痛ヲ訴ヘナカツタ。

經過。注射後自發痛ガ先ヅ輕減シタ。漸次ニ中央部ノ暗赤色ノ度ガ増シ、小孔ガ出來テ、四日目ニハ稍多量ノ膿ガ自然ニ排出セラレ、五日目ニハ中央

部三糰平方位ノ部分ノ皮膚ガ取レテ、ソコカラ比較的稀薄ナ膿ヲ多量ニ排出スルヤウニナリ、體溫モ同時ニ下降シテ平熱トナリ、爾後順調ノ經過ヲトツテ治癒シタ、(別表第一圖參照)。此患者ハ注射後三日目ニ尋常疹ヲ發シタガ二%鹽化「カルシウム」ヲ靜脈内ニ注射スルコト二回ヲ消散シタ。

第二例。堀某、四四歳、女、腹壁癰。

既往症。約六日前ニ臍ノ左方ニ小ナル腫物ガ出來、コレヲ爪デ掻イタトコロガ發赤疼痛ヲ伴ツテ腫脹シ來リ、漸次ニ増大シテ來タ。

入院時所見。稍大ナル體格ノ女性。榮養佳良。胸腹部内臓ニ著變ヲ認メズ。四肢ニ亦異常ナシ。腹部ニ於テ、臍ノ左上方ニ横徑一〇糰、縱徑七糰位ノ稍膨隆シタ部分ガアル。皮膚ハ發赤シ、漸次ニ周圍ニ移行シテキル。ソノ中央部ニ凡ソ五拾錢銀貨大ノ暗赤色ノ部分ガアツテ、更ニソノ中央ニハ小孔ガアリ、膿様物ガ見エル。觸診スルト、發赤部ニ相當シテ硬結ヲ觸レ、壓痛ガアル。周圍健康部ニ移行スル部分ニ浮腫ガアル。波動ハ觸レナカツタ。體溫三七度脈搏百四。尿中ニ糖陰性。コノ時ノ所見ハ附圖第一圖ニ示スヤウデアッ

タ。

手術。入院日直チニ自家血液四五ㇼヲ硬結ノ周圍ニ注射シタ。注射時ノ疼痛ハ訴ヘナカッタ。

經過。先ヅ自發痛ガ著シク減退シタ。硬結ハ増大スル模様モナク、第三日目ニハ自發痛全ク消失シ、皮膚ノ發赤モ輕減シタ。第四日目ニハ硬結ガ内方ヘ稍擴ガツタガ、中央部ハ軟化シテ波動ヲ證明シ得ルヤウニナリ、ソコニアツタ孔カラ多量ノ膿ヲ排出スルヤウニナツタ(附圖第二圖參照)。第五日目硬結ハ減少シテ、波動ヲ呈スル部増大シ、同時ニ中央部ノ小孔ノ周圍ガ暗紫色トナリ(附圖第三圖)。第六日目ニハソノ中央部五錢白銅貨大ガ剝脫セラレ、多量ノ膿及膿塊ガ自然ニ排出シタ。其後二日程健康ナ肉芽面ヲ見ルヤウニナリ、順調ニ治癒ノ經過ヲトツタ。體溫モ初メ四、五日ハ三七度、三八度ノ間ヲ往復シ、脈搏モ九十乃至百二十ノ間ニアツタガ、ソレ以後ハ體溫ハ平熱ニ、脈搏ハ八十以下トナツタ。

第三例。狩野某、五二歳、男、癰。

既往症。從來時々ニ疔ヲ生ズルコトガアル。約二週間前ニ、左臀部ニ小指頭大ノ腫脹ガ出來テキタガ、六日前ニ自發痛甚シクナリ、壓痛ヲ感ジ、腫脹モ増大シ、醫師ニ診察ヲウケ、軟膏ヲ貼布シテキタ所ガ、三日前ニ自然ニ破潰シテ膿ヲ出スヤウニナツタ。シカシ腫脹ハ減ズル様子モナク、益々増大シ全身ニ熱感ガアル。

入院時所見。中等大、體格榮養中等。胸腹部内臟四肢ニ著變ヲ認メナイ。歩行ハ患部ノ疼痛ノタメ少シク難事デアラルシイ。左臀部ヲ視ルト一般ニ腫脹シテキル。特ニソノ中央部ガ膨隆シテキル。皮膚ハ發赤シ、中央部ハ暗赤色ヲ呈シ、コノ部ニ多數ノ孔ガアリ、ソコニ膿樣物質ガ見エ、又アルモノカラハ濃厚ナ膿ガ流出シテキル。觸診スルト、局所溫度上昇著シク、發赤部ニ相當シテ長徑二一ㇼ、短徑一五ㇼ位ノ硬結ガ觸レル。壓痛ハアルガ波動ハ觸レナイ。體溫三六度五分脈搏ハ九十ヲ算フ。尿中糖陰性。

手術。入院翌日、自家血液三五ㇼヲ硬結ノ周圍ニ注射ス。注射ノ際カナリノ疼痛ヲ訴フ。

經過。注射後、第二日目カラ膿ノ分泌ガ著シク多量トナリ、發赤部モ大イサヲ減ジ、第三日目カラハ硬結部ガ軟化シテ來テ波動ヲ呈スルニ至ツタ。第五日目ニハ硬結ハ殆ド消失シテ了ツタ。第九日目ニハ健康ナ肉芽面ヲ見ルヤウニナリ其後速カニ治癒シタ。

第四例。湯淺某、五〇歳、女、項部癰。

既往症。五日前ニ項部ニ小ナル硬結ヲ生ジ、漸次増大シ、自發痛アリ、二日前ニ自潰シテ少量ノ膿ヲ出シタ。

入院時所見。中等大、榮養佳良ノ女子。胸腹部内臟四肢等ニ著變ヲ認メナイ。項部ヲ視ルト、毛髮部ニ接シテ手掌大ノ腫脹ガアル。皮膚ハ發赤シ、中央部拇指頭大ノ部分ニ無數ノ點狀ノ膿樣物質ガ見エル。觸レテミルト、發赤部ニ相當スル硬結ヲフレ、壓痛アリ、波動ハ觸レナイ。尿中糖陰性。體溫三六度八分脈搏ハ九十デアル。

手術。入院翌日、自家血液ヲ硬結部ノ周圍ニ注射シタ。所要血量二〇ㇼ。經過。注射ノ翌日カラ、分泌物ガ増シ、中央部漸次ニ軟化シテ、第五日目ニ中央部拇指頭大ノ皮膚ガ壞死脫落シ、同時ニ大キナ膿栓ガ自然ニトレテ、後ハ肉芽面トナリ順調ニ治癒シタ。體溫並ニ脈搏ハ平常通りデアツタ。

第五例。園田某、三二歳、男、顔面癰。

既往症。四日前ニ、右側口角ニ疼痛ノアル小發疹ガ出來タノデ、ソノ夜針デコレヲ刺シ、壓シタトコロガ、少量ノ膿ガ出タ。シカシ、翌日カラ腫脹ガ甚シクナリ、右頬及ビ下唇ニマデ擴ガリ、疼痛ガ甚シク熱感ガアル。

入院時所見。中等大ノ強壯ナ男子。榮養佳良。局所以外ニ著變ヲ認メナイ。顔面ヲ視ルト、右頬カラ口唇、左頬部ノ下部ニカケテ、著シク腫脹シテキル。皮膚ハソノ部分デ強ク發赤シテキル。口唇ハ上下共ニ腫レテキルガ、特ニ下唇ガツヨク腫レテ、外方ヘ轉シタヤウニナツテ、口唇色部ニ數個ノ點狀

ノ膿様物質が見エ、口ノ開閉ハ出來ナイ。觸診スルト、發赤部ニ温度上昇著シク、下唇ヨリ頰部ニカケ硬結ヲフレル。ソノ部分ニ壓痛ガ甚シイ。自發痛モ亦ツヨイ。尿中糖陰性。體溫三九度、脈搏ハ百二十デアル。

手術。入院ノ翌々日、自家血液注射。當時ノ硬結ハ、上ハ兩側ノ鼻唇溝、側後方ハ兩側ノ下顎骨ノ上行枝、下方ハ、顎ノ前面デ、甲狀軟骨ノ上デアル。コノ硬結ノ周圍ニ注射シタ。所要血量六〇珽。注射時ノ疼痛ハ甚シクナカッタ。

經過。注射ノ翌日ヨリ硬結部ハ依然増大シタガ、注射部ヲ越エナカッタ。下唇ノ膿様物ノ見エタ部分ハ三日目頃カラ壊死ニ陥リ、五日目頃カラ自然ニ脱落シハジメタ。第六日目ニハ頰部並ニ顎ノ前面ニ、軟化シテ明カニ波動ヲ呈スル部分ガ出來タノデ、コレニ小切開ヲ加ヘ、多量ノ膿ヲ排出シタ。シカシ、體溫ハ初メカラ日々最低三七度二三分、最高三九度位ノ曲線ヲ示シ、脈搏モ百乃至百二十ヲ算ヘ、一向ニ下降シナカッタ。第八日目、右上膊ニ硬結部ノアルコトヲ發見シ、コレニ切開ヲ加ヘタラ多量ノ膿ガ出テ、ソノ後漸次體溫、脈數ハ常ニ復シタ。トコロガ、二三日經テ、又、體溫上昇シ、脈數ガ増シテ來タ。スデニコノ頃ニハ、顔ノ方ハ腫脹モ著シク減ジ、唇ノ壊死片モトレテ、綺麗ナ肉芽面ヲ現シテキタノデ、他ノ體部ヲ調べミルト、左臀部ニ硬結ガアツテ壓痛ガアル。コレヲ切開スルト多量ノ膿ガ出タ。其ノ後矢張り三八度位ノ熱ガ五六日間出タガ、當時右胸部ニ聽診上羅音ガアリ咳嗽、喀痰ノ排出ガアツタ。且ツコノ時分ニハ顔面ノ方ハスデニ腫脹モ去リ、創ハ完全ニ治癒シテキタ。ソノ五六日間デ胸ノ所見モ去リ、體溫、脈搏常ニ復シ治癒シタノデアル。コノ患者デモ第一例ノ如ク注射ノ翌日尋麻疹ガ出タガ二三日デ消退シタ。

第六例。鳩野某、一九歲、女、顔面疔。

既往症。一週間程前カラ、顔面ノ諸所ニ面疱様ノモノガ多數ニ出來テキタガ、二日程前カラ、左頬ニアル一ツガ急ニ腫脹シテ來テ、自發痛ガアリ全身

ニ熱感ガアル。

初診時所見。(外來)。中等大、榮養佳良。胸腹部内臟ニ著變ヲ認メナイ。顔面ヲ視ルト、左頬部ガ一般ニ少シ腫レテキル。特ニ左側角カラ左上方ニカケ、凡ソ二錢銅貨大ノ部分ガ膨隆シ、皮膚ガ發赤シテキル。觸診スルト、ソノ部ニ圓形ノ硬結ヲフレ壓痛ガアル。シカシ波動ハフレナイ。

手術。即時自家血液ヲ硬結ノ周圍ニ注射シタ。所要血量一五珽。注射時ノ疼痛少シ。

經過。先づ自發痛ガ著シク減ジタ。次ギニ三八度内外デアツタ體溫ガ第三日目カラ、三七度ニ下降シタ。局所ハ注射ノ翌日ニ硬結部ノ中央ガ自潰シテ、比較的稀薄ナ膿ガ排出セラレルヤウニナツタ。シカシ硬結ハナホ存シテキタガ、第七日目カラ又三八度位發熱スルヤウニナツタ、ヨク診テミルト瘻孔ガ小サイタメニ分泌物ガ溜溜シテ居ッタノデ、コレヲ少シ擴ゲタ。ソノ後順調ノ經過ヲトリ、第十五日目ニ小サナ硬結ヲノコシテ治癒シタ。

第七例。上野某、五三歲、男、疔。

既往症。約十日前カラ右臀部ニ痒ニイ發疹ガ出來テキタガ、五日前カラ急ニ痛クナリ腫レテ來タ。

初診時所見。(外來)。中等大、榮養佳良。患部以外ニ著變ヲ認メナイ。右臀部ヲ視ルト、ソコニ凡ソ手掌大ノ略圓形ノ腫脹ガアル。皮膚ハ著シク緊張シ發赤シテキル。中央小指頭大ノ部分ハ上皮剝脫シ暗赤色デ、ソノ中央ニ小孔ガアル。シカシ膿様物ハ見エナイ。觸レテミルト、著シク温度上昇シ、發赤部ヨリ稍大ナル硬結ヲフレル。壓痛著シク、波動ハ觸レナイ。體溫三七度乃至三八度。尿中糖陰性。

手術。即時自家血液注射ヲ行フ。所要血量二〇珽。注射時疼痛ヲ訴ヘズ。

經過。自覺的ニ疼痛ハ減ジタガ、ソノ他ニ變化ハオコラナイ。第三日目ニハ發赤部ノ中央ノ暗赤色ノ度増加シ、皮膚ハソノ部分デ著シク緊張シ、自覺的疼痛モ烈シカッタ。第四日目ニナツテ、ソノ中央部ガ稍大キク白潰シ、多

量ノ膿ヲ排出スルヤウニナリ、ソノ後日ヲ逐ウテ硬結モ小サクナリ、創モ治癒シタ。膿ノ排出セラレルヤウニナルト共ニ平熱ニ復シタ。

第八例。下川某、四〇歳、男、面癰。

既往症。六日前ニ上唇ノ左ニ偏シタ部分ニ小サナ結節が出来、コレヲ壓搾シタトコロ、翌日カラ腫脹シ、疼痛烈シク、賣藥ヲ貼布シテキタガ、ソノ腫脹ノ中央ニ膿栓が見エタノデ、自ラコレヲ除去シタ。然ルニソノ翌日カラ腫脹ハ益々擴大シテ來タ。日々惡寒ガアリ三八度近ク發熱スルトイフ。

入院時所見。中等大、榮養中等。患部ヲ除イテ他ニ著變ヲ認メナイ。顔面ヲ視ルト、上唇ノ左半カラ左頬ニカケテ著シク腫脹シ、皮膚發赤ヲ示シテキル。丁度左ノ鼻口ノ下ニ、拇指頭大ノ部分、特ニ膨隆シテ上皮下缺キ、多數點狀ノ膿ヲ見ル。觸診スルト、發赤部ニ相當シテ硬結ガアル。上ハ鼻ノ兩側デ鼻唇溝マデ、上唇全體ニワタリ、左方ハ口角ヨリ稍下方ニマデ達シテキル。中央部ト雖モ波動ハ證明セラレナイ。體溫ハ三七度二分脈搏ハ六十六デアアル。尿中糖陰性。

手術。入院ノ翌日自家血液注射ヲ行フ。所要血量二〇㏄。

經過。注射ノ翌日カラ自發痛ハ著シク減退シタ。第三日目カラ、スデニ膿樣物ノ見エテキタ所カラ稀薄ナ膿ガ排出セラル、ヤウニナリ、第四日目ニハ硬結ガ軟化シテ波動ヲ示スヤウニナツタ。シカシ體溫ハ日々三八度近クマデ上昇スル。第五日目ニ波動ヲ示シタ部分が自潰シ、ソノ翌日ニハ膿塊ノ大ナルモノガ自然ニ排出セラレ、體溫モ平熱ヲ保ツヤウニナリ、ソノ後日ヲ逐ウテ治癒ニ向ツタ。

第九例。高田某、一八歳、女、面癰。

既往症。約十日前カラ、左側口角ノ上方ニ面癰樣ノモノガ出来テキタガ、四日前ニ入浴洗面ノ際ニ潰レ、ソノ翌朝ヨリ疼痛ヲ伴ツテ腫脹シ來リ、夕方

ニ惡感アリ發熱シタ。爾來疼痛アリ、日々發熱スル。

初診時所見。體格小、榮養佳良。胸腹部內臟、四肢等ニ著變ヲ認メナイ。顔面ヲ視ルト、左側口角ノ左上方ニ、徑三釐許リノ圓形ノ腫脹ガアル。皮膚發赤シ、ソノ中央ノ指頭大ノ部分特ニ膨隆シ、皮膚ノ發赤モ強イ。觸レテミルト發赤部ニ相當シタ硬結ガアリ、且ツ壓痛ガアル。波動ヲ證明スルコトハ出来ナイ。

手術。即時自家血液注射。所要量一〇㏄。

經過。翌日診ルト、硬結ハ擴ガツテヲラナイ。中央部ニ膿點が見エル。壓痛ハアルガ自發痛ハ消退シタトイフ。ソノ翌日ニハ膿栓ガ自然ニ排出セラレテキタ。熱感モナイ。第四日目ニハスデニ膿樣物ヲ見ズ、創ハ健康ナ肉芽ヲ見セテキル。第六日目ニハ創ハ癒エ、タダ深部ニ小ナル硬結ヲフレルダケデアアル。壓痛ハナイ。

第十例。澁谷某、二一歳、男、面癰。

既往症。三日前ニ頤部ノ右ニ偏シタ部分ニ疼痛ノアル小サナ腫物が出来タノデ、指先デツブシタ所ガ漸次ニ腫脹シ、疼痛モ強クナツテ來タ。

初診時所見。體格大、榮養佳良。胸腹部臟器四肢等ニ著變ヲ認メナイ。頤部ノ右ニ偏シタトコロニ鳩卵大ノ硬結ガアル。ソノ上ノ皮膚ハ發赤シ、中央ニ粟粒大ノ痂皮ガアル。右頤部ニ浮腫ガアル、硬結ニハ壓痛ガアルガ波動ハ證明セラレナイ。體溫三七度三分。

手術。即時自家血液注射。所要血量一〇㏄。

經過。翌日診ルト硬結部ニ波動ヲ證明シ得ル。壓ヲ加ヘルト中央痂皮ノアツタトコロカラ水樣膿ガ排出セラレル。自發痛ハ全ク消退シタガ顔ノ右半分ニ浮腫ガアル。ソノ翌日カラ、顔面ノ浮腫ハ去リ、排出セラル、膿モ多クナツタ、ソレモ二日程デ減ジ、第七日目ニ僅カノ硬結ヲ殘シテ治癒シタ。

第二節 Goljanitzki 氏法ヲ施シタ例

Gujamitzki 氏ノ報告シテキル様ニ、自家血液ヲ蒸溜水デ溶血セシメ、コレニ食鹽水ヲ混ジテ注射溶液ヲ作ツタ。

今假リニ、血液中ノ食鹽ノ含有率ヲ〇・九%トシタナラバ、一〇%ノ血液ヲ、四〇%ノ蒸溜水ニ加ヘ、溶血現象ヲ起サシメ、コレニ四・五%ノ食鹽水ヲ一〇%耗加ヘ、液ノ總量ヲ六〇%耗ニスルナラバ、コノ液ノ食鹽含有率ハ〇・九%トナル。即チ等壓液デアル。私ハ常ニカ、ル血液溶液ヲ用ビタ。

適應症トシテハ常ニ感染創傷ヲ選ンダ。即チ創ノ周圍ノ皮下及ビ肉芽面底ヘ注射シタノデアル。

手術後創感染二例、下腿感染創三例、横痃切開創三例、結核性潰瘍(胸部)一例、合計九例ノ創傷ニ右ノ注射ヲ日々ニ行ツテ、一週間乃至二週間觀察シタ。使用血量ハ毎回六%耗カラ十五%ヲ要シタ。

シカシナガラ不幸ニシテ創始者ノイフヤウナ都合ノヨイ結果ヲ齎ラサナカッタ。タバ一例、「ヘルニア」手術後ノ感染創ニ適用シタ際、ソレマデカナリ長イ間肉芽ノ模様ガ惡カツタモノガ、五回程ノ注射ノ後、肉芽良好トナリ周圍カラノ上皮形成モ盛トナツテ、良効果ヲ得タト思ツタモノガアルノミデアル。加之コノ注射ハ可成リ疼痛ヲ伴フモノデアルカラ、蒸溜水ノ代リニ「ネオカイン」液ヲ以テ溶血シタモノヲ用ヒテ見タガ、結果ハ面白クナカッタ。

要スルニ、コノ方法ハコレヲ追試シテミタケレドモ、著明ナ效果ヲ見ルコトガ出來ナカッタノデアル。

第三節 Vorschütz 氏法ヲ施シタ例

一、筋肉内注射法。

コノ方法ハスデニ述ベタヤウニ最モ簡單ナ方法デアル。普通ノ二〇%注射筒二本ト、ソレニ接合シ得ル針二本ヲ準備シテオク。ソノ二本ノ針ノ中一本ハ可成長クテ太イモノガヨロシイ。コレヲ注射スル方ニ用ヒル。先ヅ術者ノ手及ビ患者ノ肘靜脈部並ニドチラカノ上腿ノ前面、又ハ外側ヲ叮嚀ニ消毒スル。術者ハコノ場合デモ二人居ルノガ便利デ、第一人ハ採血シ、血液ノ充チタ注射筒ヲ第二者ニ渡ス、後者ハコレヲ豫メ上腿筋肉内ニ突キ刺シタル針ニ接合シテ、徐々ニ注射スル。ソノ間ニ前者ハ他ノ注射筒ヲスデニ靜脈中ニ挿入シテアル針ニ接合シテ採血スルノデアル。コノ操作ヲ連續的ニ行ヘ

バ、比較的大量ノ血液ヲ自由ニ注射スルコトガ出來ル。大抵一回ニ二〇乃至四〇ㇼノ血液ヲ注射シ、注射回数ハ最初ノ一回ダケデヨイコトモアルガ、日々發熱ガ續クヤウナ場合ニハ、少クトモ熱ガ繼續スル間ハ毎日注射セネバナラナイ。注射ノ際ニハ少シ疼痛ヲ訴ヘル患者モアルガ大シタモノデハナイ。又注射セラレタ血液ガ永ク硬結トシテ殘ツタリ、或ハ化膿シタリシタ事ハ一回モナイ。毎日繼續シテ注射スル場合デモ、一日オキニ同ジ部分ニ注射シテモ苦痛ヤ障害ノオコルコトハナイ。

第一例。川井某、六〇歳、男、鼠蹊「ヘルニア」、術後肺炎ヲ併發セルモノ。既往症。生來健康デアルガ、十四年前カラ、激シク運動スルト右鼠蹊部ニ小サナ膨隆ガ出來、壓スルト音ヲ發シテ消失スル。醫師ニヨリ、「ヘルニア」ノ診斷ノモトニ手術ヲウケタガ、間モナク再發シテ、腹ニ力ヲ入レズトモ出ルヤウニナリ、近來ハソノ膨隆が大キサヲ増シ、時ニハ還納シ難イコトガアルトイフ。

入院時所見。體格小、榮養良。右鼠蹊「ヘルニア」ガアル。胸部ハ右肺炎部打診音短、聽診上呼吸音ガ延長シテキル。且ツ輕度ノ肺氣腫ガ證明セラレル。其他著變ヲ認メナイ。

手術。入院翌日「ヘルニア」根治手術ヲ行フ。

經過。手術ノ翌日カラ高熱ヲ發シタ。胸部右側ニ笛音ヲ聽ク。ソノ翌日ハシカシ下熱シタ。然ルニソノ翌日ニ又モヤ發熱シ、呼吸數モ増加シタ。胸部ハ右側後方ヨリ側方ニカケ打診上短音デ、呼吸音ガ強ク濕性羅音ヲ聽ク。

療法。即日自家血液三〇ㇼヲ右上腿筋肉内ヘ注射ス。翌日又二〇ㇼヲ左上腿ヘ注射スル。

其後ノ經過。第一回ノ注射後下熱シナイ。胸部所見ニ變化ハナイ。第二回ノ注射後、體溫ハ別表第二圖ニ示サウニ下降シ、ソノ後ハ平熱ヲ保ツテキル。胸部所見ハ體溫下降後四五日間ハ存在シテキタガ、ソノ後ハ消失シテタダ打診上短ナルダケデアル。創ハ第一期癒合ヲナシ最初ノ手術後十五日目ニ

退院シタ(別表第二圖參照)。

第二例。松井某、二〇歳、男、術後ノ人工肛門、手術後肺炎ヲ併發セルモノ。

既往症。生來時々胃腸障害ガアツタ。三ヶ月前ニ、何等誘因ナクシテ突然ニ烈シイ腹痛ガオコリ、嘔吐アリ、腹部ガ著シク膨滿シタ。翌日醫師ノ診察ヲウケ、直チニ手術ヲウケ臍ノ下部ニ人工肛門ヲ作ラレタガ、コレヲ閉鎖シテ欲シトイフ。(當時ノ主治醫ノ記述ニヨルト、S字狀部軸捻轉デアツタ)。入院時所見。體格中等大、榮養ハアマリ良クナイ。胸部ニモ著變ガナイ。患者ノ云フ様ニ臍ノ下部ニ人工肛門ガアルガ、其他何處ニモ著變ヲ認メナイ。

手術。入院後種々ノ検査ノ後、二十一日目ニ第一回手術ヲシタ。ソレハ右側直腹筋平行切開デ、盲腸端ヲ引出シコ、ニ新シク人工肛門ヲ作ツタノデア

ル。コノ手術後四十一日目ニ正中線切開デ、古イ人工肛門ノ閉鎖ヲ行ツタ。即チS字狀部ト直腸トノ吻合ヲ行ヒ、人工肛門ニ用ヒラレタS字狀部ノ一部ヲ切除シタ。第三回目ハコレヨリ後五十二日目ニ右腸窩部ニアル人工肛門ヲ閉ヂタノデア

ル。經過。第一回手術ノ後三日目ニ急ニ體溫三九度六分ニ上昇シ、脈搏一四〇以上、呼吸四〇以上ヲ算ヘルヤウニナツタ。胸部ヲ聽診スルト到ル處ニ捻鬚音ガ聞エル。

療法。即日自家血液四〇ㇼヲ右上腿筋肉内ヘ、更ニソノ翌々日三〇ㇼヲ左

上腿筋肉内へ注射スル。

其後ノ經過。第一回ノ注射ノ翌日、體溫ハ急ニ下降シ三七度二分トナリ、呼吸數、脈搏數モ減ツタ。シカシ胸部所見ハ前日ト同様デアツテ、然モ夕方カラ又々體溫上昇シ脈搏、呼吸共ニソノ數ヲ増スニ到ツタ。ソコデソノ翌早朝第二回ノ注射ヲシタノデアアル。トコロガソノ夕方カラ體溫ハ漸次ニ下降シ、呼吸、脈搏共ニソノ數ヲ減ジ、體溫ハ三七度内外、脈搏ハ一〇〇内外、呼吸ハ二〇内外トナリ、胸部ノ所見モ消失シタ。ソノ後二三日シテ又少シ體溫上昇ガアツタガ、三日ニシテ下降シ其ノ後ハ著變ガナカツタ。第二回第三回ノ手術ハ極メテ順調ニ終リ、後ノ經過モ良好ニ、第一回手術後百四日ニ退院シタ。

第三例。中野某、五九歳、男、腹壁膿瘍並ニ術後肺炎。

既往症。生來健康デアアル。約一ヶ月前ニ食慾ガナクナツタ事ニ氣付キ、ソレカラ三日ホド經テ臍ノ右上方ノ腹壁ガ時々ニ痛ム。更ニ三日ホド經ツテソコニ實明大ノ腫物ガアルコトニ氣付イタ。壓痛ガアリ、體溫ヲ計ルト日々三八度近クマデ上昇スル。腫物ハ漸次ニ増大シテ來タ。

入院時所見。體格大、榮養良。腹部ニハ腹壁ノ膿瘍ト認メラレルモノガアル。胸部ハ打診上著變ハナイガ、聽診上左側後下方ニ時々中等大ノ水泡音ヲ聞ク。其他ニハ著シイ變化ヲ認メナイ。體溫最高三八度四分、脈數百八。尿中糖並ニ蛋白陰性。

手術。入院後五日目ニ切開ヲ施シ、膿ヲ多量ニ出ス。

經過。手術後創ノ模様モ漸次ニ良クナツテ、術後四十一日目ニ僅カノ肉芽面ヲ殘シテ退院シタノデアアルガ。術後四日目ニ突然ニ惡寒ヲ以テ三九度七分ニマデ體溫ガ上昇シタ、胸部ニハ右側後下部ニ濁音ガアツテ、中等大ノ水泡性羅音ガ聞エル。其他ニ全身ニ著變ガナイ。

療法。即日自家血液四〇㏄ヲ筋肉内へ注射シタ。

其後ノ經過。注射ノ翌日急ニ體溫ハ下降シ、以後平常ヲ保チ、胸部ノ所見

モ漸次速カニ去ツテ、前述ノ如ク退院シタ。

第四例。渡邊某、四三歳、男、顔面丹毒。

既往症。約十日前ニ、右耳口ノ邊ニ痒感ガアツタノデ掻イタトコロガ、ソノ翌々日ニ惡寒戰慄ヲ覺エテ高熱ヲ發シ、局所ハ腫レテ疼痛ガ甚シカツタ。ソノ後可成リ速カニ腫脹發赤ガ顔面、頭部、項部ニマデ擴ガリ、觸レルト烈シイ疼痛ガアル。毎日午後惡寒ガアル。

入院時所見。體格中等、榮養佳良。顔面ヲ視ルト、兩側ノ眼瞼カラ頰部ニカケ著シク腫脹シ、眼ハ殆ド閉ヂテキル。皮膚ハ一般ニ發赤シ、特ニ左頰部ニ強イ。觸レルト疼痛ヲ訴ヘルガ、發赤シテキル部分ハ皮膚ガ厚クフレル、猶項部耳部モ同様デアアル。何處ニモ波動ヲ觸レルトコロハ無イ。水泡モ見エナイ。發赤部ノ境界モ不鮮明デアアル。體溫三八度二分、脈數八四。尿中蛋白陰性。

療法及ビ經過。入院ノ翌日體溫ハ三九度六分マデ上昇シタ。コノ日ニ第一回自家血液注射ヲ行ツタ。血液量二〇㏄、ソノ後ノ經過ハ別表第三圖ニ示スヤウナ體溫曲線デ、毎日一回二〇㏄宛三回注射ヲ行ツタ。第三回ノ注射ノ翌日カラ體溫ハ全ク平熱トナリ順調ニ經過シテ行ツタ。皮膚ノ發赤腫脹ハ、第一回ノ注射後擴大モセズ、日ヲ逐ツテ治癒シ入院後七日目退院（別表第三圖參照）。

第五例。滋賀某、七七歳、女、丹毒。

既往症。從來時々右耳後部ニ痒感アル發疹物ガ出來テキタガ、二日前突然ニ高熱ヲ發シ、コノ部分ノ周圍ニ腫脹ヲ來シ、發赤シ、顔面ヘモ及ンデ來タ。

入院時所見。體格中等、榮養佳良。一般のニ著變ヲ認メナイ。兩側ノ耳輪ヨリ後下方ニカケ項部、後頭部、顔面ノ左半ニ皮膚發赤アリ、殊ニ左頰部ニ於テソノ度強ク、且ツ腫脹シテキル。上下眼瞼ハ強ク腫脹シテキルノデ眼裂ハ閉ヂテキル。コノ發赤ハ鼻背及頤部ニ及ビ、境界ハ鮮明デ、右ノ方ヘ進ム傾向ヲ示シテキル。顔面ノ發赤部ハ甚ダ敏感ナルモ、後頭部、耳輪部ハサホ

ドデハナイ。皮膚ニ熱感ガアル。波動ハ證明セラレナイ。體溫三八度六分脈數百二十。尿中蛋白陰性。

療法及ビ經過。入院時直チニ自家血液一〇ㇼヲ筋肉内ニ注射シタ。翌日體溫ハ稍下降シタガ三八度位ヲ續ケタ。コノ日第二回自家血液一〇ㇼヲ注射シタ。ソノ翌日ハ左頰ノ腫脹少シク減ジ、體溫ハ午後ニ三七度四分ヲ示シタダケデ、大體ニ於テ三六度六分デアツタ。爾後、體溫ハ三七度ヲ越エズ。第四日目カラ發赤モ消退シテ速カニ治癒シタ。コノ患者ニハ第二日目カラ連鎖狀球菌「コクチゲン」ヲ併用シタ。

第六例。中島某、二四歳、男、感染創及ビ淋巴管炎。

既往症。五日前右脛骨部ニ傷ヲウケ、自ラ治療シテキタガ治ラナイデ、昨日カラ高熱ガ出テ下ラナイ。(四〇度以上)

入院時所見。體格大、榮養中等。疲勞倦怠ノ様子ガアル。脈數百四十以上。胸腹部ノ臟器ニ著變ハ認メラレナイ。右ノ下腿ヲ見ルト、下三分ノ一ノ高サデ、脛骨稜ノ部ニ、小サナ創ガアル。創面ハ殆ド乾燥シテキテ、ソノ周圍手掌大ノ部發赤シ、コノ内上方カラ下腿ノ内側、膝部ノ内側ヲ通り、ソレヨリ更ニ上腿ノ前面ヘ出テ鼠蹊部ニ達スル線狀ノ發赤ガアル。コレヲノ發赤部ハ何レモ壓痛ガ甚ダシイ。波動ハ何處ニモ證明セラレナイ。尿中蛋白陰性。

療法及ビ經過。入院ノ翌日朝先ヅ自家血液二〇ㇼヲ注射シ、夕方又二〇ㇼヲ注射シタ。第二日體溫ハ三八度邊ニ下降シタガ局所々見ハ同様デアル。自家血液二〇ㇼ注射。第三日體溫ハ更ニ三七度邊マデ下降シタガ局所ハ依然トシテ同様デアル。自家血液二〇ㇼ注射。第四、第五、第六日ト日ニ一回宛同様注射シタ。第五日目ニ線狀ノ發赤ハ消退シタ。ガ體溫ハ依然三七度ノ邊ヲ上下シテソレ以下ニ降ラナイ。ノミナラズ第八日目カラ又々三八度ヲ上下スルノデ三日間毎日一回ノ注射ヲ施シタガ効果ガナイ。ヨク檢ベテミルト、下腿ノ創ノ周圍ニ波動ヲ示ス部分ガ二三アル。二日程タツトコレガ自潰シテ多量ノ膿ヲ出シ、其ノ後ハ體溫モ平熱トナリ順調ニ治癒ニ赴イタ(別表第四圖

参照)。

第七例。岡村某、六四歳、男、癰。

既往症。六日前ニ左前膊ノ屈曲側ノ中央ヲ虫ニ刺サレタガ、三日前カラソコニ搏動性疼痛ガアリ、同時ニ皮膚發赤、腫脹ヲ來タシ、日々發熱シ、局所ニ自發痛ガツヨイ。體溫ハ最高三十九度四分ヲ示ストイフ。

入院時所見。中等大、榮養佳良。一般的ニ著變ヲ認メナイ。左前膊ヲ視ルト全體トシテ膨大ニナツテキル。屈曲側ノホボ中央デ、尺骨側ニ偏シタトコロニ數個ノ膿樣物が見エ、ソノ部分ガ特ニ膨隆シテキル。皮膚ハコレヲ中心トシテ發赤シ特ニ膨隆部ニ於テ著シイ。尙肘關節部カラ上膊ノ内側ヲ上方ヘ線狀ノ發赤が見ラレル。中央ノ膨隆部ノ皮下ニハコレヨリモ稍範圍ノ廣イ硬結アルモ、前膊ノソノ他ノ部分ハ浮腫ダケデアアル。硬結部ニハ壓痛ガアルガ波動ヲ示サナイ。體溫三八度六分脈數九六。尿中蛋白陰性。

療法及ビ經過。入院翌日自家血液二〇ㇼヲ上腿筋肉内ヘ注射シタ。翌朝體溫ハ下降シタガ局所ニハ變化ナク、午後カラハ體溫ハ再び上昇シタ。コノ日ハ注射ヲ止メタガ、ソノ翌日一般狀態、局所々見ニ變化ガナイノデ、第二回ノ注射ヲ施シタ。次ギノ日體溫ハ下降シハジメタガ、更ニ第三回ノ注射ヲ施シタ。翌日カラ體溫、脈數常態トナリ、局所腫脹ハ減退シハジメ、三日目ニハ軟化シ、ソノ次ギノ日カラ稀薄ナ膿ガ盛ニ出ルヤウニナツテ、順調ニ治癒ノ經過ヲトツタ(別表第五圖参照)。

第八例。松尾某、二九歳、女、癰。

既往症。五日前ニ前額部ニ瘡瘍様ノモノガ出來、甚ダシク疼痛ガアツテ今日マデ漸次ニ擴大シテ來タ。日々惡寒ガアル。

入院時所見。體格中等、榮養中等。一般的ニ著變ヲ認メナイ。顔面ヲ視ルト、前額ヨリ左眼瞼、左頰部ニカケテ強ク腫脹シ、皮膚發赤ガアル。前額デ、中央ヨリ左ニ偏シ、數個ノ膿栓ヲ見ル。コレヲ中心トシテ周圍ハ特ニ發赤シテキル。觸レテミルト發赤部ハ皮膚ノ溫度著シク上昇シ、特ニ強ク發赤シテ

キル部分ノ皮下ニハ硬結ヲフレル。硬結ノ範圍ハ前額全體、中央デハ眉間ヲ境トシ、左頰部ノホボ中央ノ高サマデ達シテキル。波動ヲ示ストコロハ無イ。尿中糖陰性、體溫三八度六分、脈數百八。

療法及ビ經過。入院後十六日間體溫ハ日々三八度ヲ中ニ上下シテキタ。初メ五日間毎日自家血液筋肉内注射ヲ試ミタガ、局所々見ハ長クナラズ、又體溫脈搏モ變ラナカッタ。然シコノ五日目ニ前額ノ膿栓ノ見エタトコロ、並ニ左上眼瞼トニ波動ガアル様ニ思ハレタノデ切開ヲ試ミタガ、膿汁ハ出テ來ナカッタ。翌日カラ葡萄狀球菌「コクチゲン」ヲ局所ニ注射シテミタ。ソノ回数十回十日間ヲ要シタ。コレヲハジメタ日ノ翌日カラ浮腫ガ徐々ニ減退シハジメ、十日ノ後ニハ著シク減退シテ、コノ頃カラ體溫モ三七度ヲ上下スルヤウニナリ、極メテ徐々ニ治癒ノ經過ヲトツタ。ソノ間終ニ膿汁ガ多量ニ出タトイフコトハナカッタ。

第九例。橋本某、一〇歳、女、疔。

二、脱纖維素血液靜脈内注射法。

Vorschitz 氏ニヨルトコノ方法ハ、最モ進歩シタ方法デアアル、從ツテ、効果モ多カルベキデアアル。先ヅ二〇耗位ノ注射器ト五耗位ノモノトヲ用意シ、別ニ豫メ五〇耗位入レ得ルエルレンマイエル氏「コルベン」二個、及ビ其各々ニ小ナル硝子球數個ヲ入レテ、コレヲ乾熱滅菌器デ嚴重ニ滅菌シテオク。術者ハ手ヲ消毒シ、又患者ノ肘靜脈部ヲ法ノ如ク消毒セシメ、先ヅ二〇耗位探血シ、コレヲ滅菌セル「エ氏」コルベン」ニ入レ、助手ヲシテ間斷ナク振盪セシメル。十五分乃至二十分經ツト纖維素ハ塊狀トナル。コノ時ソノ液狀ノ血液ヲ小ナル注射器ニ要量ダケ吸ヒ上ゲ、コレヲ徐々ニ靜脈内ヘ注入スル。殘リノ脱纖維素血液ハソノマ、或ハ消毒シタ綿紗デ濾シ、他ノ清潔ナ容器ニ入レテ水室内ニ貯ヘテ置ク。次回ニ注射セントスル時ニハ、前回同様ノ準備ヲシテ、先ヅ探血シ、コレヲ脱纖維素スル。ソノ間ニ術者ハ、前回ニ殘ツタ、即チ舊脱纖維素血液ヲ全部注入シ、次ギニソノ日ニ處理シタ新脱纖維素血液ヲ少量注入スル。殘部ハ前回同様、次回ノ爲メニ殘シテオク。注射ハ毎日行ツテモヨイ、又二日目位ニ行ツテモヨイ。ソノ量ハ新脱纖維素血液ハ第一回二耗位ニシ、回ヲ

既往症。一週間前カラ左側鼻唇溝ニ小ナル膿疱疹ノヤウナモノガアツタガ四日前カラ急ニ腫脹シテ皮膚發赤シコレヲハ顔面ノ左半分ニ擴ガツタ。自發痛ガアル。

入院時所見。中等大、中等度ノ榮養狀態。顔面ヲミルト左頰部カラ上唇ニカケ又兩側ノ上下眼瞼ニカケ著シク腫脹シ、左鼻翼カラ上唇ニカケ皮膚發赤ガ甚シイ。ソノ部ニ壓痛ノアル硬結ヲフレルガ、波動ヲ示ストコロハ何處ニモ無イ。體溫三八度九分、脈數百八。尿中蛋白、糖陰性。他ニ著變ヲ認メナイ。

療法及ビ經過。別表第七圖ハコノ經過中ノ體溫表デアアル。入院後三日目カラ自家血液注射療法ヲハジメ、表ニモ記シテアル通り毎日二〇耗ヲ筋肉内ヘ注射シタ。ソレニモ拘ラズ第十一日目ニ死ノ轉歸ヲトツタ。局所々見ハ注射ヲハジメテ三日程ハ擴大シテキタガ、爾後漸次ニ腫脹減退シハジメ、上唇ノ一部カラ膿ガ排出セラレルヤウニナツテキタ。シカルニ第十日目頃カラ嗜眠狀態トナリ終ニ第十一日目ニ死亡シタノデアアル。

重ナル毎ニ三耗、四耗ト増量シテユク。

注射法ハ極メテ徐々ニ注入スルニアル。大抵ノ惡イ症狀ハ注入シカケタ初メノ間ニ起ルラシイカラ、患者ノ脈搏、呼吸、顔貌等ニ注意シナガラ行ハネバナラヌ。タトヘ「シヨック」様ノ症狀が起ツテモ容易ニ治ルラシイ。私モ次ニ述ベル第一例デ經驗シタガ、脈搏ガ惡クナツタリシテモ注入ヲ止メテ暫ク待ツト恢復スル。更ニ續ケテ注入シテモ危險ハ無イ。Vorschütz 氏ハ新脫纖維素血液ノ注射量ガ一〇乃至一二耗ニナツタラ、一時休ム様ニ述ベテキルノデ、私モソノ通りノ方針ヲ採ツタ。

第一例。佐々木某、一七歳、男、癩。

既往症。五日前ニ上唇ノ左ノ方ノ部分ニ小腫物が出来テ、次第ニ大イサヲ増シテ、自發痛及ビ熱感ガアツタ。二日前ニ急ニ大イサヲ増シ、顔面左半ガ腫脹シテ來タ。

入院時所見。中等大、中等度ノ榮養狀態デアル。顔面ヲ視ルト顔面ノ左半部、上唇ガ著シク發赤腫脹シ、上唇ハ特ニツヨク、上方ヘ飄轉シタヤウニナツテ、ソノ赤色部ニ數個ノ小ナル膿點ガ見エル。發赤部ハ殆ド全部硬結デアツテ、壓痛甚シク何處ニモ波動ヲフレナイ。脈搏九〇、體溫三十六度七分。其他一般的ニ著變ヲ認メナイ。尿中糖及ビ蛋白陰性。

療法及ビ經過。入院ノ翌日カラ體溫ハ高く、脈數モ多イ。葡萄狀球菌「コクチゲン」ヲ皮下ニ、〇・三乃至〇・五耗注射シ、五日ヲ經タ。シカシ腫脹ハ増シ體溫モ高イ、別表第八圖ハコノ五日目カラノ熱型デアル。第六日目ヨリ先ツ自家血液筋肉内注射ヲ試ミタ。其使用血量二〇耗。回数三回。次ニ其ノ翌日採血シ、脫纖維素シ、コレヲ次ノ日靜脈内ヘ注入シテ脫纖維素血液注射法ヲハジメ、圖ニ示スヤウニ新脫纖維素血液注射量ガ九〇耗ニ達スルマデハ毎日注射シ、其後ハ二三日ノ經過ヲ見テ行ツタ。圖ニ示ス様ニ、筋肉内注射ヲハジメテ三日目ニ體溫ハ下降シテキル。コノ時ニハ局所ノ腫脹ハ減ジ、ソノ所見ハ頁キ方デアツタ。シカシ脫纖維素血液注射ヲ始メル日カラ患者ハ

嗜眠性トナリ意識不鮮明トナリ、脈搏ハ結滯スルヤウニナリ、尿中ニ蛋白ヲ證明スル様ニナツタ。ソシテ其ノ後法ノ通り注射ヲ續ケタノデアルガ、圖ニ見ル如キ熱型ヲ示シ、一般狀態ハ恢復セズ、タダ最初ノ局所ハ腫脹全ク去リテ殆ンド治癒シタケレドモ、終ニ不幸ノ轉歸ヲトツタ。

第二例。井出某、二〇歳、男、疔。

既往症。六日前ニ右側口角ニ小サナ疼痛ノ烈シイ腫物が出来タ。放置シテオイタ所、漸次ニ腫脹シテ來タ。且ツ體溫ガ四〇度ニモ上昇スルヤウニナツタ。入院時所見。中等大、榮養良。顔面ヲ視ルト右頰部、右顎下部、頤部上下唇ノ右半分ガ著シク腫脹發赤シ、就中下唇ノ右半分カラ下方ニカケテ著シク、コノ部ニ特ニ硬結ヲフレル。上下唇ハ共ニ外方ヘ飄轉シテオル、波動ハフレナイガ壓痛ハアル。其ノ他一般的ニ著變ハ認メラレナイ。尿中蛋白及糖陰性。體溫三九度九分、脈數八〇。

療法及ビ經過。十三日間ノ入院中、日々三九度乃至四〇度ノ高熱ヲ發シ、脈數八〇乃至一二〇ヲ算ヘ、終ニ不幸ノ轉歸ヲトツタ。ハジメ二日ホド腫脹ハ擴ガツタガ、ソレ以後ハ擴ガラナカツタ。下唇赤色部ニ自潰シタ部分ガ出来テ、日日膿汁ヲ出シテキタガ、腫脹ハ目立ツテ減ジナイノデ、入院後七日目カラ脫纖維素血液靜脈内注射法ヲ試ミタ。シカシ局所ノ見モ治癒ニ向ハズ、又尿中蛋白ヲ證明スルヤウニナリ、加之最後ノ二日ホドハ日々腫脹ガ擴大シテ進ンダ。

第三章 考 察

總テ治療ノ方面デハソノ操作ガ簡單デ、患者ニ苦痛ガ少ク、而モ效果ガ多イトイフ事ガ理想デアル。既ニ述ベタ自家血液注射療法ノ操作ハ何レモ割合ニ簡單デアル。殊ニ筋肉内注射法ノ如キハ、幼兒ヲ除クノ外如何ナル患者ニデモ應用スルコトガ出來ル。且ツ患者ニ與ヘル苦痛モ少ク、又危險性モ認メラレナイ。Lawer氏法モ簡單デハアルガ、患部ガ非常ニ廣イ時ニハ所要血量モ多クナツテ、普通ノ靜脈穿刺デハソソナニ大量ノ採血ガ難シクナルノミナラズ、患部ノ位置ニヨツテハ採血ト注射トヲ同時ニ行フコトガ難シイコトモアル。タトヘバ項部カラ背部ニカケテ非常ニ擴大シテキルヤウナ場合ニハ、注射部位ヲ便利ナ位置ニ置イタマ、肘靜脈カラ採血スルコトハ難シイ。又第三節第七例ノ癰ノ如ク、前膊ニアツテ前膊全體ニ腫脹ガ強ク、單ナル浮腫ト炎症性硬結トノ限界ガ劃然トシテキナイ場合ニハ、注射部位ヲ撰ブノニ、困難デア。サウデナクテモ疔、癰ノ場合ニ、ソノ周圍何レダケノ範圍ニ炎症ガ擴ガツテオルカトイフコトヲ外カラ正確ニ定メルコトハ殆ンド不可能デアルカラ、健康部ト斷定シテ注射スルモノ、術者ニハ聊カ不安ガ無イデモナイ。又患者ノ側カラミテモ、數ヶ所ニ針ヲ刺サレルノデ、可成リノ疼痛ヲ訴ヘルモノモアル。次ギニ血液ニ溶血現象ヲ起サセテコレヲ注射スルゴ氏法ハ如何ト言フニ、ソノ溶液ヲ作ルコトモ簡單デアリ、又凝固シナイトイフ特點ハアルケレドモ、周圍ニ癰痕ガ廣クアルヤウナ創ニ對シテハ不便ナ様ニ思ハレル。最後ノ脱纖維素血液ヲ靜脈内ニ注射スル方法ハ、先ヅソノ注射法ガ他ニ比ベテ難シイ。又注入速度ヲ考ヘナイト「シヨック」様ノ症狀ガオコルコトハ、文献ニモ注意セラレテアルシ、私モ經驗シタトコロデア。即チ些カ危險性ガアル。コレヲ顧慮シテモ注射液ヲ作ルノニ、他ノ方法ニ比ベテ、相當ニ面倒ナ操作ヲ要スル。殊ニ注射スル部位ハ靜脈内デアルカラ細心ノ注意ガ必要デアル。故ニ術者ニヨツテハ、靜脈内注射ヲ行ヒ得ル場合ニ制限ガアルコトハ勿論デアル。但シ患者ノ側カライフト、コノ方法ハ他法ニ比ベテ疼痛ガ少イ。要スルニ、筋肉内注射法ヲ除イテハ、タゞ注射スル操作ノ上カラデモ適應、不適應ガ問題ニナツテ來ル譯デアル。

然ラバ操作上ノ注意サヘスレバ、コレヲノ自家血液注射療法ハ絕對ニ無害デアラウカ。文献ノ示ストコロ、又私ノ經驗

デハ、幸ニコノ注射療法ガ不幸ナ結果ヲ齎シタコトハナイ。シカシナガラ、前章、第一節ノ第一及ビ第五例デハ、注射後短時日デ蕁麻疹ガ出テキル。元來蕁麻疹ハ通常蛋白質分解物ノ中毒症トシテ現ハレルモノデアルカラ、一種ノ蛋白質デア
ル血液ノ注射ニ近接シテ此蕁麻疹ガ現ハレテキル以上、コノ兩者ノ間ニ何等カノ因果的關係ガ存在スルノデハナカラウ
カト考ヘラレル。

次ギニ効果ニ就イテ、先ヅ第一節レ氏法ノ結果ヲ一覽スルニ、第五例ヲ除クノ外ハ、スベテ先ヅ自發痛ガ著シク減退シ、
硬結部ニ波動ヲ觸レルヤウニナリ、多クハ廣ク自潰シテ膿排出盛トナツテ治癒ノ經過ヲトツテキル。スデニ一般世上ニ知
ラレテキル通り、疔、癰ノ多クノモノハ、何等積極的ニ加工シナクトモ、自然治癒ヲナスモノデアル。從ツテ私ノコノ十例
モ自然治癒ノ結果デアツタカモ知レナイ。然シナガラソノ治癒ニ趣ク經過ハ、平常我々ガ見ル自然治癒傾向ヨリモ、著シ
ク迅速デアルコトハ明ラカデアル。乃チコノレ氏法ハカ、ル疾患ノ自然治癒ヲ著シク助長スルモノナルコトヲ肯定スル
コトガ出來ル。第二例及第五例デハ、注射後ソノ炎症ガ周圍ニ擴ガツタケレドモ、共ニ血液注射部ヲ越サナカッタ。コノ
事實ハレ氏ガ高唱シタコロニコロニ一致シテキテ、コノ方法ノ主効デアル。シカシナガラ第五例デハ、其後ノ經過中諸所ニ膿瘍
ヲ形成シテキル。コノ膿瘍形成ハ轉移ト考フベキモノデ、注射前スデニ血行中へ病芽ガ侵入シテキタモノト思ハレル。從
ツテ若シ適當ナ時期ニレ氏法注射ヲ行ヘバ、カ、ル疾患ノ進行ヲ防止スルコトガ出來タカモ知レヌ。レ氏ハ前記ノ治癒傾
向ノ速イコトヲ、血液ノ殺菌力、及ビ蛋白質トシテノ作用ニ歸シテ居ル。シカシナガラ、私ニハ次ノ如キ臨床例ガアル。

例。酒井某、七〇歳、男、癰。

既往症。十日前ニ項部ニ疼痛ナル腫脹ガ出來テ、日々惡寒戰慄ガアル。
六日前ニ自潰シテ膿ヲ出ス様ニナツタガ、腫脹ハ依然擴ガアル。

入院時所見。體格小、榮養良カラズ。胸部ニ聽診上大水泡音ヲ聽クダケデ、
他ニ著變ヲ認メナイ。背部ヲ視ルト、項部カラ背部ニカケテ、小兒頭大ノ腫
脹ガアル。皮膚ハ發赤シソノ中央拇指頭大ノ皮膚缺損部ガアツテ、濃厚ナ膿
汁ガアル。觸レテミルト腫脹部ハ硬ク、壓痛ガアル。波動ハフレナイ。體溫

三八度四分、脈數九〇、尿中糖陽性。

療法及ビ經過。別表第六圖ハコノ患者ノ熱型デアル。入院後モ自發痛甚ダ
強ク、第三日目ニハ發赤、腫脹ガ著シク周圍ニ擴ガツタ。ソコデソノ周圍ニ
生理的食鹽水一四〇ㇼヲレ氏注射ノ如クニ注射シタ。トコロガ注射後三日目
頃カラ腫脹ガ減退シハジメタ。且ツ自發痛ハ注射ノ翌日カラ著シク減退シタ。
膿ノ分泌モ盛ニナリ、治癒ニ傾イタト思ハレタガ、注射後五日目頃カラ自發
痛又々強クナリ、且ツ腫脹ガ再び擴ガリカケタ。ソコデ第六日目更ニ第二回

ノ注射ヲ行ツタ。使用食鹽水一四〇ㇼ。コノ注射後自發痛ハ著シク減退シ、——如ク體溫モ下降シテ、其後順調ニ經過シタ。コノ患者ハ同時ニ「インシュリ局所ニ於テモ中央部ノ壞死部擴大シ、分泌物モウスク多量ニナリ、圖ニ示ス——」療法ヲ施シタ。

コノ例ニ見ル如ク、糖尿病患者ノ癰ノ如キ、極メテ擴ガリ易ク、且ツ豫後ノ惡イ症例ガ「インシュリン」ガ併用セラレテ居ルトハ言ヘ生理的食鹽水注射ニヨツテ、急ニソノ擴ガリガ防止セラレ、且著明ニソノ自然治癒ガ助ケラレテキル。即チ血液ノ如キ種々複雑ナ組成成分ヲ有タナイ生理的食鹽水デモ、コレヲレ氏法注射ノ如ク用ヒタ場合ニハ、ソノ効果ニ於テハ血液ト同格デアル。コレカラミルト、レ氏法注射ノ際ニ於ケル血液ノ有効作用ハ、單ナル機械的防止作用乃至之レニ因スル局所の充血作用ノ外ニ出デナイモノト信ゼラレル。

ゴ氏注射法ノ效果ニ就テハ、前章第二節デ述ベタ如ク、私ノ九例ノ臨床例ニ於テ殆ンド之レヲ認メルコトガ出來ナイ。私ハタゞ創ノ臨床的觀察ダケデ血液像ヲ調べナカツタカラ細密ナコトハ云フコトガ出來ナイガ、兎モ角モコノ注射療法ハ著シイ效果ヲ示サナカツタノデアル。

筋肉内注射法ハ前章、第三節一、ニ述ベタ通り、九例ノ種々ナ急性炎症性疾患ニ試ミタ。其ノ結果ハ第一例カラ第七例マデハ、マコトニ良好デアル。シカシナガラ、其各々ノ病歴及ビ經過ガ示スヤウニ、コレヲノ疾患ノ自然治癒經過ト著シイ差ヲ認メルコトガ出來ナイ。從ツテコノ結果カライフナラバ、コノ注射法ハ單ニコレラ疾患ノ治癒ニ何等カノ誘因ヲ與ヘタゞケノモノデアラウカ。第八例ノ如キハ殆ンド效果ガ認メラレナイ。其經過日數及ビ注射回數カラ推シテモ若シフオ氏ノ説クヤウニ免疫の效果ノアルモノナラバ、今少シ著シイ徵候ガ現ハレハシナイダラウカ。第九例ニ至ツテハ更ニ効果ノナイノミカ、終ニハ全身のニ病芽ニ征服セラレテキルデハナイカ。強イテフオ氏ノタメニ説クナラバ、コノ二例デハ、スデニ、ソノ血液ニフオ氏ノ唱フル「プソイドグロブリン」ガ低下シテキタノカモ知レナイ。

フオ氏ノ説ク如ク、血液ニ免疫の價值ガアルナラバ、ソシテソレガ臨床的効果ヲ齎スモノナラバ、脱纖維素血液靜脈内注射ハ正ニ氏ノ言フ様ニ最良ノ方法デアル。シカシナガラ、不幸ニシテ私ハ前章ノ如キ臨床例シカ有タナイ。二例共ニ臨床床上他ノ重要ナル臓器ヘ轉移シタコトヲ信ジサセル。殊ニ第一例ハ死後剖檢シテ兩腎、腦、肺臟ニ膿瘍ノアツタ事ヲ確メ

ルコトが出来た。然シ私ハフオ氏ノ説ク假説ニ反對スルモノデハナイ。又 König 氏ノ如クコノ療法ヲ以テ單ニ採血スル際ニ於ケル單純ナル瀉血ト同一視スル者デモナイ。其様ナ効果ノ本態ニ關スル議論ハ之レヲ後日ニ讓ルコト、シ、此處デハタゞ臨床的實例ヲ掲ゲ、以テ其效果ヲ是非セント欲スルダケデアル。

第四章 結 論

一、自家血液注射療法ヲ左ノ四種ニ分類スル。

(イ) Læwen 氏法。

(ロ) Goljanitzki 氏法。

(ハ) Vorschütz 氏筋肉内注射法。

(ニ) Spiethoff, Vorschütz 氏脱纖維素血液靜脈内注射法。

二、操作ノ上カライフト、筋肉内注射法ガ最簡便デ危險性ガ無イ。

三、適應症ノ方面カライフト、筋肉内注射法、脱纖維素血液注射法ガ一般的デ、レ氏法ハ疔、癰ニゴ氏法ハ感染創傷ニ限ラレテキル。

四、Læwen 氏法ハ疔、癰ニ對シテ、ソノ進行ヲ阻止シ、同時ニソノ治療ヲ促進セシメ、經過ヲ短クスル。ソノ有効作用ノ主體ハ機械的阻止作用デアルト思ハレル。

五、Goljanitzki 氏ノ創傷療法ハ效果ガ著シクナイ。

六、Vorschütz 氏ノ筋肉内注射法ハ肺炎、丹毒、淋巴管炎、癰等ニ適用シテ、ソノ治療ヲ誘導セシメルコトハ出來ル。シカシ又同様ノ疾患ニ對シテ無効ノコトモアル。

七、Spiethoff, Vorschütz 氏ノ脱纖維素血液靜脈内注射法ハ著効ヲ現ハサナイ。

八、治療ニハ特異性ノモノモアルガ、多クハ種々ノ治療法ノ集リガ一ツノ疾病ヲ癒スモノデアル故ニ、上記ノ種々ノ自家血液注射療法モ、夫々適當ニ臨床上ニ試ミルノガヨイト思フ。

Literatur.

1) Goljanitzki, Zur Frage der „integralen“ Therapie (Eigenblutbehandlung) infizierter Wunden. Zentralbl. f. Chir., 1924, Nr. 29, S. 1599.

- 2) Graser, Ueber die Behandlung postoperativer Bronchitis u. Pneumonie durch Eigenbluteinspritzung nach J. Vorschütz. Zentralblt. f. Ch., 1925, Nr. 45, S. 2514.
- 3) Hilgenberg u. Thomann, Experimentelle Untersuchungen über die Aufhebung von Giftresorption durch abriegelnde Bluteinspritzung. Deutsch. Zeitschr. f. Chir., 180 Bd., 1923, S. 267.
- 4) Hübner, Die Behandlung der Bartholinitis gonorrhoeica durch Blutumspritzung. Deutsch. med. Wochenschr., 1924, S. 13.
- 5) König, Beitrag zur Aether- und Eigenblutbehandlung bei postoperativen Lungenkrankungen. Deutsch. Zeitschr. f. Chir., 199 Bd., 1926, S. 198.
- 6) Löwen, Ueber die Behandlung fortschreitender pyogener Prozesse im Gesicht mit Inzision und Umspritzung mit Eigenblut. Zentralblt. f. Chir., 1923, Nr. 26, S. 1018.
- 7) Ders., Zur Behandlung maligner Gesichtstumoren mit Inzision u. Umspritzung mit Eigenblut. Zentralblt. f. Chir., 1923, Nr. 39, S. 1468.
- 8) Ders., Ueber abriegelnde Eigenblutinfiltation mit nachfolgender Inzision zur Behandlung fortschreitender pyogener Prozesse im Gesicht und Nacken. Zentralblt. f. Chir., 1924, Nr. 38, S. 2076.
- 9) Linhart, Zur Behandlung maligner Gesichtstumoren mit Inzision und Umspritzung mit Eigenblut. Zentralblt. f. Chir., 1924, Nr. 28, S. 1510.
- 10) Nicolas, Gatei e Dupasquier, L'autocotetrapia nella tumuculsi. Lyon chirurg., 1923, Septembre et Octobre.
- 11) Schack, Prophylaxe der postoperativen Lungenkomplikationen u. deren Behandlung mit Aether- und Eigenblutinjektion. Deutsch. Zeitschr. f. Chir., 1926, 199 Bd., S. 205.
- 12) Spiethoff, Dehnmertes Eigenblut in der Reiztherapie. München. med. Wochenschr., 1922, Nr. 27, S. 1003.
- 13) Tillmann, Maligne Röntgengeschwüre und ihre Heilung. München. med. Wochenschr., 1924, Nr. 16, S. 516.
- 14) Vorschütz u. Tenckhoff, Von der Behandlung mit Eigenblut. I. Mitteilung. Deutsch. Zeitschr. f. Chir., 183 Bd., 1923, S. 364.
- 15) Dies., Von der Behandlung mit Eigenblut. II. Mitteilung. Deutsch. Zeitschr. f. Chir., 184 Bd., 1924, S. 200.
- 16) Vorschütz, Ueber Eigenbluttherapie. Arch. f. klin. Chir., 1924, 133 Bd., S. 509.
- 17) Wolfsohn, Zur Frage der integralen Therapie (Eigenblutbehandlung) infizierten Wunden. Zentralblt. f. Chir., 1924, Nr. 40, S. 2194.

附 圖 說 明 (第二章、第一節、第二例参照)

- 第一圖、注射前。
 第二圖、注射後四日目、膿汁ノ排出セルヲ示ス。
 第三圖、注射後五日目、中央自潰セル部ノ周圍ガ暗紫色トナレルヲ示ス。
 第四圖、注射後六日目、中央五錢白銅貨大ノ部分が缺損セルヲ示ス。

別 表 說 明

- 第一圖、第二章、第一節、第一例参照。
 第二圖、第二章、第三節、一、第一例参照。
 第三圖、同、上、第四例参照。
 第四圖、同、上、第六例参照。
 第五圖、同、上、第七例参照。
 第六圖、生理的食鹽水ヲ以テ Löwen 氏法ヲ施セルモノ(第三章参照)。
 第七圖、第二章、第三節、一、第九例参照。
 第八圖、第二章、第三節、二、第一例参照。



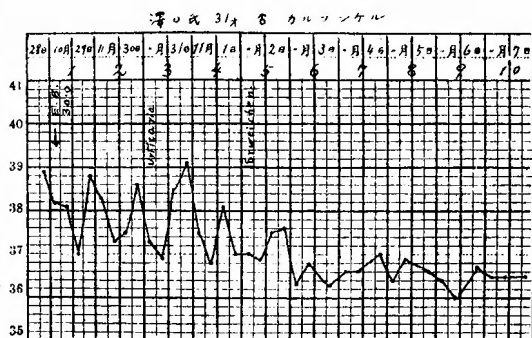
圖 四 第



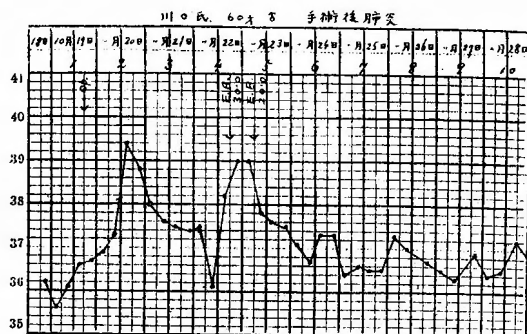
圖 二 第



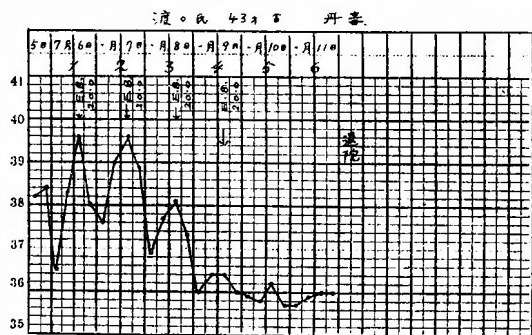
第一圖



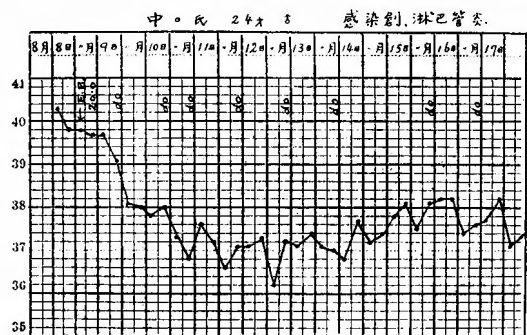
第二圖



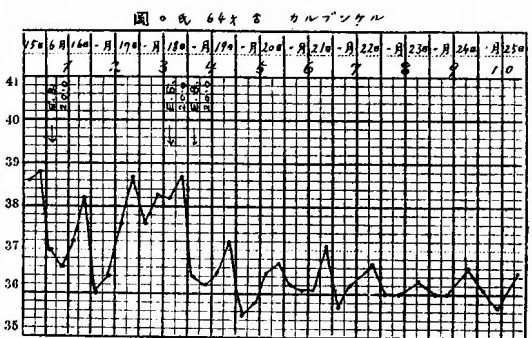
第三圖



第四圖



第五圖



第六圖

